

## 佐藤友彦師所蔵 九冊本間狂言「詠之類」(その2)

飯塚 恵理人\*

## 要旨

この九冊本からなる間狂言本は、現在和泉流狂言方佐藤友彦師が所蔵されているもので『国書総目録』第六卷「能の本」の間狂言の本に山脇元康氏所蔵として載るものであり、以前に故表章氏が御覧になった際、「内容的には大藏流のもので、貞享松井本、筑波大学本と並び、大藏流の間狂言本として最古に属する内容ではないか。」と筆者に言われたことがある。この間狂言本についてはすでに第六冊まで翻刻しており、今回第七冊目の翻刻を掲載させて頂く。内容に関する吟味は後日とし、とりあえず本文を翻刻・紹介させて頂きたい。

## (凡例)

底本に忠実に翻刻することを心がけたが、読解の便宜を考え、以下の点について改めた。

- 1、旧字体は原則として新字体に改めた。
- 2、私に句読点を施した。

- 3、能の曲名は《》で囲んだ。
- 4、底本の書き入れは( )で囲み、その書き入れの該当部分に示した。
- 5、底本の墨消チとなっている部分は【】で囲んだ。

## (目次)

- (146)《雷電》 (147)《輪藏》 (148)《飛雲》 (149)《葛城天狗》 (150)《大磐若》 (151)《一角仙人》 (152)《富士山》 (153)《菅丞相》 (154)《松山》 (155)《生簀》 (156)《空巴》 (157)《玄上》 (158)《空腹》 (159)《正尊》 (160)《錦戸》 (161)《楯尾》 (162)《太勢太子》 (163)《龍虎》 (164)《檀風》 (165)《縄鈴木》 (166)《桜間》 (167)《巖洞》 (168)《犀》 (169)《河水》 (170)《調伏曾我》 (171)《馬乞佐佐木》 (172)《第六天》 (173)《降魔》 (174)《石橋》

## (本文)

## (146)《雷電》

か様に候者ハゑんりやく寺のぎすほつしやうばうの僧正に仕ゑ申のふ力にて候。只今出る事よのきにあらす。きもたましいもきゆる

程おそろしき事有て是ゑ出た。其子細ハ天下の御きたうのため、僧正百座のごまをたき給ひ、きのふまんざにて候處に、つくしにてうせ給ひし菅丞相御出有て、つまどをたき給ふ。僧正たれなるらんとてとをひらき見給へハ菅丞相にてまします。ふしんに思召、おことハすきにし春はて給ひたると聞て有が、何とて御出有たるぞと仰候へハ、其事にて候。むしつのごんげんによりながされし其あたをほうぜんためほんでんにきせいしなるかミとなつてさんけんのともがらをけころすべきため来りたり。我内裏にゆかハさためで僧正に御出有御祈禱あれとのちよくしたつべし。我していのけいやくあさからす候へハかまいて御出有なとの御ことわりのため来りたるとのたまふ。僧正もつともの御事なり。されども此山ハ天子の御祈願所なり。さりながら様承るうゑハちよくし二度迄ハしたひ申べし。三どにならハ参るべしと仰られしかハ、菅丞相ことのほか御きしくかわつて、我等がうらミの程を見せ申さんと、ぶつだんに有しきくろを取てかミくだき、つまどにくわつとふきかけ給へハ、くわゑんとなつてもゑあがる。僧正しやすいのゑんをむすんてはんじのミやうをとなへ給へハくわゑんたちまちきゑ菅丞相ハけむりにまさきれ雷電いなづまくろもをたなびかせだいにゆき、さま／＼のあくじを被成候間、あのごとく僧正に御出あれとのちよくしたび／＼に及候間、僧正もぜひに及せ給わす。今度ハ御出有べしとの御事にて候。ミな／＼御ともの用意仕れとの御事にて候へども、僧正こそくるしかるまじけれ。御ともに参たる者どもけころし給わふするハうたがひも御ざない程に御ともに参る事はなるましく候間、御尋被成候ハ、此由御申有て給り候へ。其ぶん心得候へ。／＼。

(147) 《輪蔵》

か様に候者ハ、山城国おたきの郡北野の末社ふくべの神にて候。

先当社と申ハ、延喜の臣下すが原の菅丞相にて御ざ候。此御方ハさうらにほんけにあらず。ほつしやうの都よりあまくだり衆生さいどの御ほうべんにかりに人間とあらハれ、ちゑさいかく人にすぐれ給ふにより、御門の御おほへならびなく候へハ、しへいのおとゝそねみざんげんをもつてつくし安樂寺ゑながされ給ふ。しかれどもほんでんにきせいしざんさうのともからをたいらげ、其後王城のちんじゆとなり、れいげんあらたにしてしよぐわんをかなゑ、ことさらむしつのなんをのがれさせんとの御たくせんにて候。去程にひぜんのたさいふに、ふしきの住僧の有か、うちかミと当社と同一鉢の事成ハ、其ゆいしよをもつて只今さんけい申され候て、輪蔵をおがまんとこの御事にて候。此輪蔵と申は、しやか一代のさうきやう五千よくわんをつミおき、しゆしやうを佛道にいんだうし給ハんとこの御事なり。此御経ハくわつし国よりしんだんにわたりしをふだいしふもんふげんとて其身ハそくたいなれども此経をしゆごし、しちいきほんてうにわたし、はじめハ九しうに納しをたゑなる宝物なるに、いなかハいかゞと有て都に上せ此北野に納給ふ。此輪蔵をちぐうす人は佛法にいたらぬという事なし。扱かの僧ハたいないを出しより、五かいをたもち佛法のこゝろざしあさからす、ちうや御経おこたらす、まことにしゆしやうなるそうなれば、当社末社とあらハれ、かの人にことばをかハし、二どうしにおほせつけられ、一切経をおがませ申せとの御事なる間、其分心得候へ。／＼。

(148) 《飛雲》

か様に候者ハ、本山くま野のごんげんに仕ゑ申末社の神にて候。去程に只今是ゑ出る事よのぎにあらず。本山の山伏出羽のはごろ山ゑ参られ候が、木曾の山がにて飛雲と申鬼、本山の山伏の命をとらんためにかの飛雲、老人のすかたに出たち、たきゝをおいて、いか

にもおもしろきもみちなどの有所にたきををろしおき、やすむていにもてなし候處に、山伏たちハ何となく老人にことばをかけられ候へハ、かの老人よろこびやがていのちをとらんために色くおもしろき物語を仕り、かけもみちの名所委かたり、とかくいのちをとらんとすれども、山伏と申わ忝もゑんのきやうじやのあとをつぎ給ふ程の山伏なれハ、いかでかさうなふ取べき。惣而ゑんのぎやうじやと申ハ、いにしゑを尋るに、やまとの国ちわうじの里の人にて候が、つねの人間にかわりたり。其子細ハ、ぎやうじやの御は、おつとのさいあいもなく日月のやうきをうけくわいにんをせられ、ゑんのぎやうじやむまれさせられたり。しかるにぎやうじや其里にもすミ給ハす。葛城山のいわやにこもりいてひほうをおこない、鬼神をもしたがゑ思ひのまゝにさしつかい、我身も心のまゝにこくうをまかけり給へり。か程たつときぎやうじやのあとをつぎ給ふ山伏の御事にて候程に、中く命をとる事もなるまじく候。ことさら飛雲と申鬼が山伏の命をとらんとするもごんげん御存じ有て、いそぎ此末社にたちこゑつげしらせよとの御事にて候間、只今木曾の山がへいそいで参らばやと存る。いにしゑの役行者ハ鬼神をも心のまゝにつかい給ふに、其あとをつきける山伏の命をとらんとする事、いかなる飛雲なりともたちどころにてめいわくいたし、とる事はなるまじく候。さりながら山伏たちもゆだんせられたらハいかやうの事があらうもしれまいと存る。いや神通をもつてせつなが間に信濃の国木曾の山について候。扱山伏たちハいづくにいらるゝぞ。されハこそ是にいらるゝがさむくにくたびれたるていにて候。扱もしやうだいもないていかな。いや此ぶんにてハじこくがうつる。いそいでつげしらせ申さう。いかにきやくそう。是ハ御熊野のごんげんのしんちよくなり。さいぜんた木をおひて御身にことばをかけたるハ

此山にすむ飛雲と申鬼なり。御身をたぶらかし命をとらんとする間、仏力をもつて命を取れ給ふなどの御事にてごんげんよりの神勅なり。其分心得候へ。く。

(149) 《葛城天狗》

か様に候者ハ、大ミね葛城山をかけまわりてすむこのは天狗にて候。扱も天下おさまりめでたき御代なれハ、人間もかりそめのいさかいこうろんをもちたさす。我等ハ左様の事を見てこそなぐさミ候へ。なふく何事をいわれますぞ。いやおぬしハ何としていでたるぞ。其事しや。おぬしを尋たれハ見ゑぬ程に爰迄尋てきて有ぞ。やれくうれしやおぬしにあふて力をゑたよ。扱おぬしハ何事にぞあふたか。其事じや。かたく我等ハ人のけんくわこうろんを見てこそなぐさめ。めでたき御代なれハさやうの事ハなし。とせんのおまりにちとなぐさまふと思ふてあまのがわゑ出たれハ、わかき者ともが六七人よりあひてよねんもなふざうたんしていた程に、ちとなぶりて見うすると思ふてそばへいたれどもかたく我等ハ人間のめに見ゑぬによつて見つくる者もなかつた程に、さらハちとなぶらうと思ふて其内にわかき、いかにものはらのあしさうなやつめがはなをはじいたれハ、きやつめがきもをつぶいてたれがしたぞと思ふてきろくとするところをうしろへまわつてあたまをくわつしりとはつたれハ、はらをたてて、どいつめがしたぞというてはらをたて、しんどうするところで、いや我ハしらぬ人ハしらぬというところを、又そばなやつめがみ、のねのぬくる程ひいたれハ、ごんごだうだんの事をしおる。おれかみ、をひきぬかうとしたというてとりあひつかミ合くんすこうろんする程におもしろうてとんすはねつしたれハ、きかくどうじの御出有て、是程めてたき御代にさたのかざりをしをる。いで物見せうとて、うちつゑをもつて思ふさまなやまされて爰

迄にげてきたハ。それハさたのかぎりをした程におしかりやつたが  
だうりじや。いやおぬしも今迄<sup>な</sup>わるひ事をせぬ事ハ有まいぞ。いや  
くそれがしハわるひ事をした事ハなひぞ。かくさすともいわしめ。  
くるしうない事じやぞ。それハ久敷事じやが此葛城山のふもとにち  
いさい子共<sup>ら</sup>が三人あそんでいた程に、其内<sup>うち</sup>でうつくしい子を取かく  
いたれハ、のこる二人がきもをつふいてこそあるらう。大ぜい人を  
かたらうて太鼓、かねをた、いて此山をわけ上る程に、うれしうて  
とびまわつて見物したれハ、きかくどうじの御出有て、ごんごだう  
だんの事をしをる。はやくかゑせと仰られてした、かなやまされた  
程に其ま、かやいて其後ハわるひ事した事がない。されハこそおぬ  
しもわるひ事した事が有ハ。それにこりていまハせぬ。それにこり  
ぬ者ハあるまひぞ。やいそれもくるしうない事が有ぞ。それハ何事  
ぞ。只今きいたが此山の大天狗ハミなくがたのふだお方じやがミ  
ね入の山伏たちの只今此山を御つき被成たるをちとなぶつて御らん  
せられうするとて出合給ひて、ことばを御かわし被成たるときいた  
が、我等の存るは、佛力の有間ハ、山伏たちをなふらせらるゝ事ハ  
なるまいと思ふて、あんするがおぬしハ何と思ふぞ。誠にそれハ大  
事をめされ出さうする。佛力神力にハ力もいるまい程に、おちどを  
とりやる事があらうかと思ふ。我等の存るハ、か様の時力をそゑて  
たのふだる御方に奉公をしたけれども、大天狗ハいかやう成事があ  
つてもくるしかるまいが我等がやうなるよハ者ハばうにふらるゝ事  
があらう程に力をそめる事ハ成まいと思ふハいかに。是ハいわしま  
すごとくしぜんあしき事かあつたらハ我くが<sup>が</sup>かやうなる者がめい  
わくせう程にた、思ひとゝまらしめ。いやかやうに申内にたのふだ  
御方が出られて何事をしだされうもしらぬ程に、まきぞへにならう  
より只とうくのいたらハよからうか。何とおもハしますぞ。是ハ

尤じやいそいでのかしめ。さらハ我くが心中をうたふていなふ。  
いそいでうたわしめ。このは天狗ののぞみにハく大風・つち風人  
くこそりてあたまをはり合、くんづころんづいさかいするを見物  
すれハ、心もきよくおもしろけれど、飛行自在にとひ廻れハ、きか  
くどうじハ出合給い、さもあらけなくやまされて、さもあらけな  
くしかられて、ひつそとしてこそうせにけれ。

(150) 《大磐若》

罷出たるハ此かわのあるじしんじや大わう仕を申しよりうのけん  
ぞくにて候。扱もたいたうのれいがんじのじうそうげんじやう三蔵  
法師大磐若のミやうぢくをしんだん国にわたさんと思ひたち、度  
く命をとられ給へ共、しやうをてんして大磐若経をわたさんとの  
御望成を、しんじや大わう三蔵の心中を御らんぜんがため、七度迄  
命を取、大磐若経をとめ給ふ。しかれどもぜひとと思召心中を  
いたハしく思召、此度ハ大磐若経をわたし申さんとの御事にて、則  
此かわへ出むかい給へハ、三蔵しんじや大わうにむかい、此川のわ  
たりぜをとわるゝ。大わう此川のふかき事こんりんざいなり。はや  
き事、いるやも物のかずならず。其上此川を御わたり有てもあのそ  
うれいを御とおり有べき事かたかるべしと御申あれハ、むかしもと  
をりし事のあれハこそ、かゝるためしの御入候やらん。大わうげに  
もと思召、なんじあまりにふかき心ざしなれハ、わそうにあたへ申  
べしとて、此川のおもてをかふりのばんをはしるがごとくにする  
くとはしりわたり、御かゑり被成、大磐若をおい、又三蔵の命を  
度く取給ひたる其かうべを見せ申されんとの御事なり。さあらハ  
廿五のぼさつ迄も横向なされんとの御事成ば、此りうさ川のうろく  
す、そうれいのけだ物迄も罷出、此度成佛のゑんをむすび候へ。其  
分心得候へく

## (151) 《一角仙人》

是ハ天ぢくはらないこくのかたはらに住居する仙人にて候。只今  
 是多出る事よのぎにあらず。爰に目出度事の御ざ候へ共又我等ハち  
 と氣遣をいたす事の御ざ候。其子細ハ、此国に一角仙人と申てつう  
 りき自在のいきおきすぐれたる仙人わたり候。此仙人ハしかのたい  
 ないにやどりてしゆつしやうしたる仙人成が、有時一角仙人雨のふ  
 る時ありき候て、すべりてころばれはらを立て、我神通をゑて何事  
 にてもあれ、すこしのあやまちをもすまじきと存るに、ころんでか  
 やうによこれ候事、しよせん龍王と申者が有てあめをふらす程に、  
 龍王のくせ事にて有と申て、しよりうわうをことくあつめてふ  
 うじこめておかれ候程に、あめ一度もふらすして国中のひでりもつ  
 てのほかな。御門、さ有におめては方便をもつて一角をたふらかさ  
 うすると思召、三千人のきさきの御内にせんだぶにんと申て、なら  
 びなきびじん御ざ有を、道にふみまよひたるていにもてなし、かの  
 一角のすみかへまよひゆきたるやうにして御出有。さけをすゝめ給  
 ふ間、一角の心もよわくとなり候て、其まゝさけをのむ程にく  
 めつくわと給酔、しやうだいもなくせんごもしらすふし申された。  
 其ひま龍王たちいわやをやぶり出んとてこのほかもよう有と申。  
 さすがの一角なれども御門の御方便に依てさけをのまれ候て仙人の  
 通力をうしなわれ候べき事かへすくもれうじ成事なり。急此やう  
 だいを一角につげしらせばやと存る。あらしやうだいなていやな。  
 なふいかに一角仙人鎧にきゝ給へ。御身をたぶらかしさけをすゝめ  
 酔臥給ひたる其ひまに龍王たちをいださんとたくミてさけをしいて  
 有に、何とてそれをのミ給ひたるぞ。只今龍王いわやをやふりい  
 んとの御事なり。あらしやうだいなていや。とうく目をさまさ  
 れ候へく。

## (152) 《富士山》

是ハ千間大ぼさつに仕へ申末社の神にて候。しかるに此富士山と  
 申ハ、仁王三十二代の御門ゆふりやく天王の御宇に、一日一夜の内  
 にゆじゆつしたりし山なれとも、かすみにかくれ、見付る人もなか  
 りしに、仁王三十一代ひたつ天王金光四年にゑんの行者の見付給ひ  
 て、則山をふみわけ給ひて此方富士山と申事はじまりたり。中宮よ  
 り下ハこんりんざいより出来たり。中宮より上ハ天よりふりて御ざ  
 候により天地和合山と申て三国ふさうの山なるによりもろこしより  
 ほうしと申者、此国にわたり、ふらふふしのくすりをもとめんため  
 此富士山に上りて色くくすりををもとめ給ふ。今又しそつと云者  
 此国にわたり富士山に尋入候處大ぼさつあわれミ給ひ、ことくく  
 御くすりのやうだいおしゑ御申候。ことに当山の御くすりをふくす  
 るともがらハ、しよひやう七びやうともにじゆミやうあんおんに成  
 事うたがひなし。猶もこんげんかくや姫御姿をあらハし給ひ、富士  
 のくすりをもろこしの勅使にあたへ御申有べきとの御事にて候。其  
 間ハ待どをに御ざあらうする。それかしにも罷出一曲をも仕れとの  
 御事にて候間、一かなでかなで帰らう。目出度かりける時とかや。  
 あらく目出度やくな。かゝるめでたき折からなれハ、我等がや  
 うなる末社の神も、あらハれ出てうたひかなて、是迄なりとて末社  
 の神ハくもとの社にかへりけれ。

## (153) 《萱丞相》

か様に候者ハ、ひゑい山僧正のたに、住居する能力にて候。只今  
 是多出る事よのぎにあらず。きもたましいもきゆる程おそろしき事  
 の有て罷出た。其子細は僧正ハ百座のごまをたき給ひ、きのふま  
 んにて候處に、こんやつくしにてはて給ひたるかんせうじやう御出  
 有て、つまどをたたき給ふ間、僧正たれなるらんと、戸をひらき御



らんすれハ、菅丞相にておハします。此御方ハ生所もなきふり人に  
てましゝと申。其子細ハすかハらの宰相御子ほしく思召、あ  
けくれねがい給ふ所に菅丞相ハ五六歳のうつくしき男子と成て宰相  
殿の御にハに只一人立給ふを御らんじて、あやしめ、かたゝハい  
づくより御出被成候。誰人の御子ぞと尋給へハ、父母もなき者なり。  
御身の子に成申度と御申候へハ、宰相殿よろこび給ひ、ふしのやく  
そく被成やういく有しかハ、ちゑ第一の御方なり。やがて当寺法性  
坊を頼、がくもんを御させ候へハ、何事にてもくらき事ハなかりた  
ると申。天子きこしめされ、めし出し給ふところにさいがく人にす  
ぐれ候へハぎよかん有て御くらい次第ゝにあかり給ふをみなゝ  
そねミ給ひてざんげんさまゝ有しかハ、たさいゑながされ給ひ、  
御つれゝのあまりにや都のていしやうにうゑおき給ふ松梅の事を  
御哥によませられしかハ、草木こゝろなしとハ申せども心ありて、  
つくしゑとび来り候程に、菅丞相うれしく思召、ざんげんによりな  
がされたるむねんをさんせんため高山にあかり、一まきのほうもん  
をあそハしほんでんにむかつて御きねん候へハ、天よりくろくもま  
ひさがり一まきのかうもんを取、はるかか天にあがりしが、ぼんて  
んこんじきのもんじにて天満大自在天神とじんがうふりくだり候  
間、扱ハぐわんじやうじうしたるとて山よりおり給ひしが、かうじ  
被成てよりあら人がミとなり給ひ、こくうにひぎやうし此寺ゑ来り、  
僧正ゑの仰にハ、にこれるよにむまれ、むしつのざんげん力なく候。  
さりながらいかづちとなつて天子ハ扱おき、ざんげんのともがらを  
けころすべきため来りたり。我都にゆかハさため僧正に御出有て  
御きたうあれとのちよくしたつべし。我としてのけいやくあさか  
らす候へハいかなるちよくしなりともかまいて御出候な。ことわり  
のために来りて有とのたまへハ、僧正の仰にハもつともの御事なり。

かやうに承る上わちよくし二度迄ハじたい申へし。勅使三どにおよ  
ば、さのみハいかゝとのたまへハ、菅丞相のけしきかわつてぶつだ  
んに有しざくろをおつとつかミぐだき、つまどにくわつとふきか  
け給へハくわゑんと成てもゑ上るを、僧正御らんじて、しやすいの  
ゐんをむすんてばんじのミやうをじゆせられ候へハ、くわゑんハ其  
まゝきへければ、菅丞相ハけふりにまぎれだいにゆき、さまゝ  
のあくじを被成候間、あのごとく、僧正ゑ勅使たびゝにおよび  
候程に、僧正もぜひに及す御出有べきとの御事なり。御ともによ  
うを仕れとの御事にて候へども、僧正こそくるしからすとも、御と  
もに参たる者どもハけころし給わふするはうたがひもあるまじく候  
程に此たびの御ともに参る事ハなるましく候。しぜん御尋候ハ、此  
由御申有て給り候へ。其分心得候へゝ。

(154) 《松山》

か様に候者ハさぬきの国しろミねのさがミはうにじよくするこの  
は天ぐにて候。扱も仁王七十五代崇徳院と申奉るハ鳥羽第一の王子  
なり。御弟近衛院に御くらいをゆづり新院と申奉る。しかれハ近衛  
院程なくかうじ給ののち新院第一のてうにん新王を御くらいになし  
奉んと思召処に、ひふく門院御はからいにて鳥羽第四の王子本院と  
申を御くらいになし給ふ。後白河院是なり。此いしゆに依て新院本  
院御兄弟の中ふはになり、新院御むほん有べしとて、宇治の左大臣  
悪左馬を頼給ふ。ふけかたにハ六条の判官ためよしふしとにも武者  
大将とさだめ給ふ。本院の御みかたにハくわんねん七月十一日とらの  
こくよりミやいくさはしまり同たつのこくにかせんやふれ新院うち  
まけ給ふにより八月十日に当国ゑ下着有。なを嶋と云所に御はい所  
をつくり、四方についじをつかせ口一つあけ、日に三どのくごをそ

なへ申ならではとう人なし。まことにひなの御すまひあさましく、あきもやうやくふけゆくまゝに松をはらう嵐のおと、くさむらもよわるむしのこゑ、思へハきのふのゆめのごとし。さもないしへはたのしみにほこり、きよくらうきんでん百官けいしやうにいつかれ、あるひはきんぐくの花をもてあそび、なんらうの月にうそふきすてに三十八年をおくりしに、いかなるせんせのしゆくがうにかゝるなげきにしづまんや。其時の哥にはまちどりあとは都にかへれども身ハ松山にねをのミぞなく。ひとへにごせの御ためにとて五ぶの大ぜうをあそハしかねの音もきこへさん所におさむるもふびんなり。王城ちかき八幡山にこめたく思召、平治元年の春のころ仁和寺へ御上せ候へハ主上此よし聞召、御手跡だに御ゆるしなく、つゐに御返し候へハ、しんいのほむらきわもなし。我あくねんさんげのためこの経をかきつるにいかで此ねんをさんぜんと、御げきりんのあまりにまだうにゑかうしてまゑんとなりいこんをはらさんとかきの御衣にすゝかけ、長ときんをめされ、大ぜう経のおくにちをもつて御せいじやうあそハし、ちいろのそこにしづめ給ふ。か程いきどおりあさからぬ法皇なれハ、さがミばうもつともいたハしく存ぜられ、玉躰にちかづき奉り、くわいけいをすゝがせ申べきとの事にて候。其年の十二月九日に悪左衛門信頼卿にかたられよしともむほんをおこせしも、ひとへにさぬきの院の御りやうゆゑなり。いよくあくねんに依ていきながら天狗の姿に御身をやつし御つめもはやし給ハす。御ぐしをもそらせ給ハす。扱もおそろしき御よそおいにておわします。長寛貳年八月廿六日に御年四十六にてしど、云所にてほうぎよ有。しろミねにてけふりとなし奉り、すてに五十年に及候へども、たれあたとふらふ人もなきところに西行法師しゆぎやうのついでに、只今けんとうさむきに松山の御べうゑ尋来られ候処に新院の

ばうしんかりにいやしき老人とあらハれ、御道しるべ被成候。西行あさましきみさきを見奉り一しゆの哥に

よしや君むかしの玉のとことても

かゝらんのちハ何にかハせんとか様にゑいじ給へハ、ばうこんもうれしく思召、さらハぎよくたいをあらハし夜もすがらぶかくをそうしてなぐさめ給わふするとの御事にて候間、か様のおりからさがミばうにもしよ天ぐをともない参内仕れとの御事成。ミなく其分心得候へく。

(155)《生贄》

あんないとハ何事にて候ぞ。やどをからせたいと仰候か。やすき間の事、やがておくの間へ御とおり候へ。見申せハあしよわしうも御ともにてことにおさなき人も御入候が是はいづかたよりいづくゑ御出被成候ぞ。

それハはるくゝのたびにて候。ゆるくゝと御くつろぎ候へや。や。思ひ出いて候。明日ハふじの生贄にて候。此よし申さう。いかに申候。我等はつたとしつねんしておやどを参らせて候。明日ハふじの御神事にて候。其やうだいハ生贄と申てふじのまいけへ人をそなへ申が、此しゆくにとまりたるたび人にくじをとらせ申て一のくじを取たる人をにゑにそなへ申候。夜中なりとも御たちあれかしと存候。さればこそたひ人のやくにて候。いづかたゑ成ともさうく御出候へかし。尤にて候。さらハこなたへ御出候へ。(シカく中入。みきわにひれふしなきいたり。)

(らんじやう) か様に罷出たるハふじのまいけに年久しくすむ大蛇なり。只今是へ出る事よのぎにあらす。今日ハふじこんげんより我等に生贄をあたへ給ふ程に丸のミにいたさうすると存て罷出て候がさためてにゑをハそなゑ事ハ有まじきと存る。扱もうれしい事

かな、今日の御神事をまちかねて御ざ有。やうく生贄のじぶんに成て候が何者をそなへて有ぞ。いそいでのまふと存る間が一段とおもしろい事じや。そなへたかしらぬよ。さればこそ生贄を舟にのせておしいたいたハく。やれくうれしやのふでくれうぞ。いやくよく見れハあれはいまだおさなき者にて有。さりながらあれをあらけなふのふすなとしてきばをあて、ハかわい事じや。たゞ丸のミにいたさう。さらハかしらからのまふ。あ、いやくかわい事じやがどこからのまふぞ。のミどころがない。たゞねぶりのみにするくとのまふわん。何と申ぞ。ひのみこの神を御つかいにて只今の生贄をハたすけ被成る程になのふぞとの事にて有と申か。やれそれハまことか。いやこんごだうだんの事をいたいて候。扱もとくのふてくれう物を何かとあせらかいてのミそこなふた。扱ものこりおほい事かな。只くちにのふでくれう物を。あまりぢやうだんがすぎてさたのかぎりをいたして有。とうのふたらハくるしう有まい物を。いやくしかれどもふすなどしてごんげんよりしかられてハなるまいが、のまぬがましになつた。さだめて此分にてハ有まい。我等にハべちのに糸を給る事もあらうする程に、くるしからぬ事にて有。まことに此人ハ我くがのミそこなふた程の事にて有間、なをじゆミやう長おんにあらうする事ハうたがひなし。さらハ先大蛇ハひつこまふ。(うたひ) あらくのこりおほくもたすかる生贄やくとて大蛇ハみいけのそこに、大蛇ハ見おきちすいのそこにたつぶとしづんでうすにまかれてうせにけり。(ことは) あ、しないたりく。

(156) 《空巴》

か様に候者ハ、山城国あたご山ぢざうごんげんに仕へ申のふりきにて候。只今是へ出る事のぎにあらず。一山のともがら今夜ふしぎの御れいむ有。其子細ハ今日しやうじんのミだ如来御とうざん有

間ミなく罷出おがミ申せとの御事にて候程にひめいよりミなく罷出いかやう成人ぞおがミ申さんとあつまり候ところに念佛の行者空巴上人御参候程に、扱ハミだ如来御来光と存、おのくおがミ申處に、爰にきどく成事の候。法花どくしゆの内に龍神翁のすがたにげんじ上人に申やうハ、上人のかんどくし給ふ佛舍利をくだされ候へ。我三ねつのくるしミ有をまぬがれ申さんと申されしかハ、思ひもよらぬ事なり。我等ハ舍利をかんどくせず。又此くびにかけたる御經ハ延喜の御門より給りたる御經なりと申され候へハ、其八ちくの中に正身の仏舍利一りう有。それを我に給るならハねつさねつふうこしつてう三つくるしミまぬかるべしと申けれハ、上人ふしぎに思召、ぢくをはなし御らんあれハ、誠に佛舍利ありつるを則龍神にあたへ給へハ龍神きゑつのあまりに此ほうおんに何にてもそのミ給へ。かなゑんと申。空巴が身の上にのぞミあらず。さりながら此山を見るに用水なし。しからばことに龍神ハ水を心にまかするものなれハ此いたゞきに清水を出し候へと御申候へハ、それこそやすき御事なり。三日の間に清水を出し申へきとて其まゝうせ申て候。まつせなれどもかゝるきどくをおがミ申事、ひとへに当山の御りしやうにて御ざ候。惣而先此あたご山と申ハ、御かいさんハきやうしゆん法師、だんなハ大しよくわん御まごきよまるの御こんりうなり。御本ぞんハ六道のふけのしよくん地藏にて、しゆらのつかさとしてしんいのほむらをめつし佛道に道ひきし、げんざいにてハあくまをがうぶくしさいなんのはらい給ふ。かるがゆへに天狗のとうりやう太郎坊此山にしゆごし、あく人をはうぜん人をすくい給ふ。是しやうじきのだうりなり。扱又空巴と申ハ、ないしんに法花をどくじゆしほかにハ念佛の行者として諸国をしゆぎようししゆじやうをさいどし給ふ。か様に有がたきお上人をミなくのこらず罷出おがミ給



ふべし。かまいて其分心得候へく。  
 (157)《玄上》(ワキ大しやう大臣もろながきやう御ともして大臣も出る。)

か様に候者ハ都大じやう大臣もろながのきやうに仕へ申者にて候。只今是へ出る事よのぎにあらす誠に申に及はざる御事成ども我等のたのミ奉りたるもろながこうハ、天下にかくれなきびわの上手にておわします。ことさら此もろながこうをあめの大<sup>大臣</sup>殿と申奉る其子細ハ、ひと、せ日本のひでりおびた、しくてまことにさうもくもかれはて五こくのたねもうせぬべきとて国土の人民なやミかなしむところに、もろながこう都しんぜんゑんのいけのはたにてあめのいのりのためびわをひき龍神にたむけあめをこい給へハ、龍神びわのひきよくにめで、あめをふらす事じうじつにおよべり。それよりしてさうもくめくミをうけ五こくじやうじゆ仕り国土のなげきをしづめよろこびのまゆをひらき大臣殿の御ひわのいとくなりとて則あめの大<sup>大臣</sup>殿と申奉る。惣而天下の名物三めんのびわと申ハ、仁王五十四代にんミやう天王の御宇にたうしをつかわされ、けんじやうし、丸・ぜいざん三めんのびわをつたへとつて、きてうせられ候折ふし、龍神のそミをかけ、浪風あらくして日本の都へ入がたくおほへて候間、龍神にたむけのためし、丸といふびわをかいていにしづめ申されしかハ、それよりやがて浪風しづまりなんなく都にきてう有て、玄上とせいざんと此二めんのびわ代く御門の御たからなり。去程にもろながこう思召やうハ、我てうにおゐてびわのあふぎをきわめ給ふ事われにならぶ人なき上ハ、につたう被成いよくきんのひきよくを御きわめあらうするとはや都を御出有て、此すまの浦に御つきにて候が、此浦ハ月の名所なれハしはらく御逗留有て月を御らんあるべきとおほしめされ候やらん、おもしろげなるしほやに

おやとかり給へハ、老人夫婦出合て御やとを参せ夜もすがらひわを所望仕、しんかんにちやうもんあれハ、おりしもあめふり物さはがしくきこへしかハいたやのやねをあらためとまやになしてうしをぎんし、かんるひをうかめ奉るけしき見ゑしかハ、大臣殿ふしんに思召、これハた、人にてハよもあらじ。きんのひきよくをしりたる者なるべしとて、ひわを御所望被成候へハ老人夫婦御びわを給り、かんにたへなるばちをとつまおとけたかくひきならず。大臣殿御きもをつぶされ、我朝におそらく我程の者有まじと思ひしに、かやうにびわの上手有けるをしらざる事こそむねんなれ。此上ハとたうありてもせんなしとて、につたうの事思ひとまりしほやをしりのびて出給へハ、老人夫婦たち出て、御そでをひかゑてしきりにとめ奉る。

大臣殿なにしに我をハ左様にとめたまふ。扱御身ハいかやう成人ぞと尋給へハ、其時今ハ何をかつつむべき、我ハ村上の天皇のゆふれい。老じよハなしつばのにようこの御ゆふれいなるが、大臣のにつたうとゞめんがため、むちうにまみへ来りたりとてかききやうにうせ御申なされたる程に、大臣殿も忝き御事成ハいよくにつたうの事御とゞまり有べきとの御事なり。されども今少のこりおほく思召先此所に御逗留有べしとおほせにて候間御ともの人くもゆるく御入あれとの御事なり。かまいて其分相御心得候へく。  
 (158)《空腹》

か様に候者ハ吉野十八がうのきも入にて候。只今此所へ出る事よのぎにあらず。判官殿を此山にかゝおき申を頼朝きこしめされ、いそぎ義経をうちとつて参らせよ。さなきにおゐては吉野郷ともにうちはたさるべきとの御事なるによつてしゆとのせんぎにハいままでかゝおき申も、しぜん御なかなをりも有べきかと存てこそかゝゑおきしに、かやうにおほせいださるゝゑハいそぎうちとつて参

らせうずる。さりなからたゞよのつねにてはうち申事もなるまじく候間、ようちをかけて見申さうずる。さやうの事もじこくうつしてハなるまじく候程にこんや夜半じぶんにようちをかけてくちくつまりくによき者をまたせしぜんうちもらすにおゐてハ其者どもにうちとめ候へとのせんぎにきわめて候間、たうさんの者一人成ともいでぬ者あらハし、そんくにいたるまで一つなわにく、つて吉野川へながさるべきとの御事なり。やうくじぶんもよく候程にいそいでまかりいで候へ。其ぶん心得候へ。く。

(159) 《正尊》

案内とハたれにてわたり候ぞ。其事にて候。たのミたる人ハ道よりさんくのていにて候間。御出の事申上べきやうも御さく候。さあらハ其由申さうずる。いかに申候。武蔵殿の御出有て御めにか、らうするとおほせ候。いやはや是へ御出にて候。これハ静御前の御内にある者にておりやします。わらハ只今是へいづる事よのぎにても御さない。鎌倉殿より土佐正尊と申人御登りにて御さ有を堀川殿にてのとりさたにハ頼朝殿より君のうつてに上せられたるともつはら申により御ふしんにおほしめし、さる人をつかわされ候へどもそれにてもわけしれず候程に其ま、武蔵殿の御出有て土佐殿をめしつれらるべき由御申候へハ正尊ハ道より風の心ちにて候間やうじやうして御出有べきと申され候へどもぜひのもんどやむくなり。た、御出あれとて土佐殿を御前へともない御出なされ候ところに君も色くのこのやうを御尋なさる、土佐殿とかくの事ハ申されずして鎌倉殿の御代官として熊野へ参候。此事いつわりとおほしめし候ハ、きしやうを書いて御めにかけ申べきとて御前にてあらけなききしやう書申わけられ其後宿へ御帰り候が、何とやらん其ふぜいふしんにおほしめしてやがてかぶろを忒人土佐の宿へやうだいを見せ

につかわされ候へハ、いまにおゐて帰り申さず候により、武蔵殿ハなをもあやしくおほしめしたゞことにてハあるまじい程に女ハよもとがめじと有て、わらわに参り正尊のやどのていを見て参れとの御事成間、一大事のことにて候へども御しうのおほせにて候間参りやうだいを見て参うずると思ひさふらう。是がまことならハもつたいたい事にて候。参る程に是が土佐殿の宿にておりやします。やらふしぎや。何とやらん此あたりハひひそくとしてさ、やきまわるかと思へハ、どゞめいて物すさまじきていにて候。ことのやうを見るにきびしきていと見えたが、あれハ何事ぞ。やい。何と申ぞ。それハまことか。扱く是ハいかな事、門外に忒人のかぶろをきりふせておき、皆人くハ物のぐして弓をはり、うつばをつけ長太刀をとりなをし、くらおき馬をたてならべ、殊外おびた、しきていにて、中く人をよせぬといふハまことか。されハこそたゞことでハあるまい。堀川殿へよせて参ハひつちやうてあらう。ゆたんしてハなるまひ。わらハが見るまでもない。急ぎ罷帰り武蔵殿へ申さばやと思ひさふらう。なふおそろしやく。

(160) 《錦戸》

御前に候。畏て候。いかに此内を案内申候。和泉ノ三郎殿御さ候か。錦戸ノ太郎の御出にて候。なふいそがわしや。いかにあんない申候。大かた殿よりの御使にて候。錦戸ノ太郎殿の御申ごと三郎殿の御同心なきにより太郎殿まふぜいにておしよせられ候間、先何方へ成とも御忍びあれとの御使にて候。是ハいかな事。にがくしい事が出来た。何と仕らうぞ。はうがくがないよ。やいく何事ぞ。く。扱おぬしハ子細をしつて出たかやうだいをハしらぬか。いや何とも子細ハしらぬどもおぬしがきもをつぶいて出たといふほどに、何事なりとおおぬしがあとをくるミやうと思ふて出たよ。扱も

其心がけハ満足した。さらハ子細を語つてきかせう。先心をしづめてきかしめ。頼朝義経の御中われた事ハよもにかくれがないによつて判官殿ハ秀平を御頼なされ此所々御下向にて候間、扱秀平の御ちそう中へ心もことばもおよばぬ程のかつがう申され候處に、秀平にわかに御煩付被成、いまをかぎりで見へさせ給ひて候。折ふし御子息達をことく秀平の御前へめされ御ゆいごんに義経の御事ハ我くを頼是まで御下向被成候間、我等たのまれ申上ハ、しぜん鎌倉殿よりうつてむかい候とも心一つにしてふせぎた、かい、五年にて有ならハ秀平がし、そんくにいたるまで義経の御かげをもつてらくくそだつべし。かまいてく義経をよきうやまい申せとてかたくゆいごん有てのちむなくならせられたるといふが、是ハたのもしい事じやな。扱それについてのゆい事じや。鎌倉殿よりもぶりがくの印判を被成、錦ノ太郎殿多御行書被下た處に、はや義経此由きこしめしけるか、太郎殿日々にしゆつしめされけれども判官殿さらに御たいめん被成ず候間、太郎殿殊外ぶきやう有て御行書ハくださる。さあらハ此事思ひ立べしとて、太郎殿ハ和泉ノ三郎殿へ御出有て此由かくとおほせ候へハ、三郎殿ハ秀平殿御ゆいごんにかたく御申候程にかくごにおよばぬ。むほんにおゐてハ中く同心いたすまいとおほせきかれたる間、太郎殿の御きげんあしくなつて其ま、御立被成た。三郎殿のかたい事、人間の内にハあるまいとの皆くおほせられごとじや。扱太郎殿ハじこくうつてかなふまじいと有て、三郎殿へまふぜいをもつておしよせ三郎殿をうちとらんとのことなれハ、一はうにハにがくしい事じやという者も有。一はうにハ此度一てがらをいたさうといふてはやくそくをきる者も有。たてをしめてしんどうする方も有。こてをとつてすねあてにし、

すねあてをこてにし、はち巻をおとがいにしてうろたへ、誠やくたいないいて有が、いづれかやうの折ふしいづかたへ成とも大ぜい引つれかせいに参りおほ多をとらうと存、先是まで出たるが、かたくハ何と思ふぞ。いや某ハおぬしがいでたるによつてこそ是まで参りたれ。どうなりともおぬしがるやうにならうまでよ。それハ近頃じや。しかと其分か。あふ其分じやが先おぬしハ何と。其子細ハぎりのかたい御方しや程にかちになつた事ならハくわつと地行をハくだされう程に和泉の三郎殿へ参らうかと思ふハいかに。あゝそなたハむふんべつな事をいわします。太郎殿ハまふぜいなるが三郎殿ハたゞ一人。其上某ハ太郎殿の御りやうぶんにいる程に、今迄ハそなたと一しよにいたそうと存たがおぬしハ三郎殿びいきと見えた。三郎殿ゑいかしめ。もはや某ハ太郎殿多是よりすぐに行ぞく。やいくそこな者まていやい。く先談合せうぞ。いや言語道断の事。申さうやうもおりない。みどもにちうせつのやうに申程にまことかと存て万の事をかたつたれハ語せずまいておゐて某ハ三郎殿びいきじや我ハ太郎殿多行といふすて、其ま、はいつた。物ごとくにゆだんいたせハ人にめがくる、と申がまことにて候。何と仕てよう御ざらうぞ。はたといきあたつて御ざ有。いやく我等も人も身をもつがかんようじや。太郎殿のおかちになるハちやうの事。某も太郎殿多参らうする。いそげく。

(161) 《楯尾》

皆く承り候へ。我等が御しうきくち殿嶋津方と一たんの口論のあげくに大喧花に成、嶋津方を大ぜいうちとつて候。其事嶋津殿御聞候て多勢をもつて只今此方へよせ来り候事一ぢやうにて候間、此方にもおびた、しき御用意にて候が、爰にせうし成事の候。それをいかにと申に、きくちとの御兄弟藤左衛門殿と申ハ御参けいにて他

行にて候が、御子息に千若殿と申ておさなき御若子の候が皆く御内の者どもをめしつれ此度の御かせんに御出候ハんと仰られ候間、御内の楯尾色く御とめ候へども御承引なく候。其上御母ご様しゆく御とめ候へども中く御同心なく候。誠武家とよりやう程有ぞ。ついに御出候由きわまり申、御上様より御重代の御太刀千若殿へ御遣し候。此度の事にて候間、御内の者共男ハ上ハ六十、下ハ十二三をかぎり一人ものこらず罷出候へ。其分心得得へく。

(162) 《太勢太子》

(ハジメ) かしこまつて候。皆く承り候へ。ひむなる民にたからをあたへ給ふべきとの御事なり。いそいで参られ候へ。く(中入) 罷出たる者ハ天づくはらないこくの御門太勢太子に仕へ奉る者にて候。扱も此君国土の民のひんなる事をかなしミ給ひ、ほん天にきせいし給ふ。其時龍宮の寶女意宝玉を太子にあたへ給ふ。則きうちうにおさめ給へハ七珍萬宝みちくたる御事にて御ざ候。やがてつづくに高札をたて、たからを民にあたへ候へハ、女一人来り、我宝の望ならず。如意宝玉を一め拝せ給へと申。いやくさうちうふかくおさまりたりけれハかなふまじきとおはせ候。其時かの女申やう望をかなへ給はん事いつわりなり。おがまんと申。さすが、りんげんいて、二度かへらず。玉を拝せ給ふ。かの女けしきかわつて玉をぬすミて龍宮に帰ぬ。しかれハばん天たいしやくをともない龍宮を御したがへ有べきとの御事にて候。其ぶん心得候へ。く

(163) 《龍虎》(中入家路をさして帰りけり。)

是ハ此あたりに住仙人にて候。爰におもしろき事の候。龍虎のた、かいの候が、人間のいせいをあらそい申やうにかわる事なく候。けだものと申ながらいづれものぎくらしいたかきものにて候。きんりやう雲をうがつてハもふこゑんさんの風をいだと申ならハし候。雲

井にす【む】(め) ハ龍虎をおりつけ、天子の御がをりやうがんとたとゑ、御乗物を龍かと申。又虎と云物ハ竹の中を住かとする事候。其内のきなき物にて千色のかけなと申。常しうしたるものなり。仏法のあきらかなる事をしつてらかに仕へ、ちすいの内にも入龍さんすれハ雲をうる。虎うそふけハ風生ぜすとも申ならハし候。けだ物の中にていづれもくらしいたかき物にて候。是式つのけだものと申ハ月花のこつくいづれもせうれつあるまじきものと我ミの聞及たるハかくのごとくにて候。やがてたたかいはじまるぞ。皆く見候へ。其分心得候へく。

(164) 《檀風》

御前に候。畏て候。案内とはたれにて渡り候ぞ。是ハはるく御下りにて候程に引合申度ハ候へどもめしうとのゆかりの人を引合申事きんぜいにて候間、かなひ申間敷候。それハ尤にて候間、御きげんをもつて申上候べし。しばらくそれに御まち候へ。いかに申上候。都にてハ東山今熊のなぎの木の坊そつの阿沙利にて候が、おさなき人を同道にて少人ハ助朝の御子息にて候が、助朝卿ハ本間殿の御あづかりにて此所に御座候由きこしめされ、いま一度御たいめん有度よし御申候間、御供御申有参りたると申され候。御たいめんハ何と御ざあらうするぞ。其よし申て候へハ少人を御供申是まではるくくたり候。本間殿まで引合てくれよと申され候間御たいめんあらうするにて候。畏て候。最前の人の渡り候か。御きげんをもつて申上候へハ御大法にてめしうとのゆかりなどに御たいめんハなく候へどもはるく下り給へる心中労働候間御たいめんあらうするとの御事にて候。こなたへ渡り候へ。畏て候。皆々承り候へ。此程めしうどのばんに草臥申べく候間、我やに帰り、やすみ候へとの御事にて候。其分心へ候へく。扱もく言語道断の事にて候。そうべつ物にハ



ゆだんいたすまひ事にて候。最前の山伏と少人と本摩殿をやミ／＼とうち申た。さりとてハにが／＼しい事を仕りて候。先おつかけうと存、是まで出て候。そなたへ山伏と少人ハ参らぬか。こなたへもゆかぬか。扱も／＼くちおしき事かな。あゝ、されども本摩殿の御うんつきたるゆゑかと存。それをいかにと申にいつも日当番かた／＼おほせ付られて候に、此程せいきをつくしめしうとの番を仕りたる程にやすみ候へとおほせ付られたる間、我も／＼と皆帰り申た。それをかのやつばらがよくきいて、番ハなし。心やすく忍び入たる物であらうするが、扱かやうの事ハ御うんのつきたるゆへにてハおりなひか。それがしをはじめて心がけもなふて帰りたる程に以来ともにくちをもきかうやうがおりない。ふかく仕つた。いとけなき人ハふんへつても有まい程にてまへでうちたるをおやのかたきとおもハれたるハ道理なり。かの山伏が少人にそのことわりをも申て本摩殿ハいつたん此国の御けにんなればあづかり、じやういなれハぜひに及す候。少人のおやのかたきハ相模守高時にて有。たうざあづかりちうし申されたる本摩殿をかたきそと心得、とも／＼うつたるふんべつなしの山伏がにくひ事にて候。いやかやうに申てじこくをうつしてハかなふまい。ならぬ迄もおつかけう。惣而此嶋ハ人の出入じゆふにならぬ嶋にて候。殊更れうじを仕たる者ハにぐる事がならぬ程に少の間おそくとも二人ながらうちつぷそうずるハぢじやうの事。さりながらあとを見れハ誰もつゝ、かぬ程に某一人わるうおつかけて見えあふたらハ二人ハ身をする者なり。殊更本摩殿さゝうつたる大高の者にて有程に某一人ハ物の数にもいたすまひ。そくじにしてとられうハうたがひもおりやるまひ。てがらをいたさうとして命をうしなふてハいらぬ事。爰がしあんどころじや。只罷帰つてぐんべうをそろへて参うする。かまへてのくでハないぞ。引ぞ／＼。

(165) 《繩鈴木》(頼朝鈴木トノ問答有)

(頼朝) いかにか誰か有(問) 御前に候。(シカ／＼)

(問) 畏て候。扱／＼我君の御いくわう申もおろかに候。是をいかにと申に義経ハまさしき身の御兄弟にて渡らせ給へども何と思召候やらん。我君にやしん御ざ有由を聞召土佐正尊をうつてに上せ給ふ處に土佐坊も大事に存、たばかつて夜打にせんとて都堀川ゑおしよせ候處に義経にため給ハす。おつはらい正尊ハいけどりちうし申され都にてハかなふまいいとて西国ゑ御下有べきとて舟にめし西国ゑおもむき給ふ。やしの有がひつじやうやらん。天命のかなしさハなんぶうふいて御ともの人／＼の舟どもちり／＼にふき被成、行方しらす成給ひ候間義経もちから及ず和州吉野郷を頼御入候處に、吉野法師心がわり仕由きこしめし奥州秀平のたちたかだちの城に御ざ候間、君是をきこしめされ御下し文を被成まふぜいをもつて御せめ有べきとの御事なるに紀州熊野あたりに有し鈴木ノ三郎重家ひごろ熊野山家にかくれいたるが此由承り急罷下り義経の御せんどうを見とゞけ申さんとして夜に日をつゐで下る所に、天のあみがきさつてあしいたみぬ事誠に天もなふじうましますか。君の御いくわう目出度御事にて候。さためて只今御前にて何事ぞ御尋被成其後かうへをはねられうするか。かの重家がのぞミもかなわずやミ／＼とちうし申されうする。鈴木が心中思ひやられてかゑつていたわしく存。いやとかく申内にじこくがうつる。いそいで鈴木三郎重家を御前へ引出されいと申さうする。(ト云テがくやへむいて) いかにて候ぞ。(頼朝) いかにか誰か有。(問) 御前に候。(問) 畏て候。(同) いかに申。先かたわらへ入候へとの御事にて候。(鈴木) 畏たと御申候へ。(問) 心得申て候。(同) じやういのことく鈴木ノ三郎をか

たわらへ引申て候。(シカく)(間)畏て候。(間)いかに申。我君の御ぢやうにハ只今いしくも申て候間なわを御ゆるし有べき程にめしつかわれんと御ぢやうにて候はいかに。(鈴木)先畏たと御申候へ。(間)先畏たあ。心得申て候。やれくすいさんハやつじや。先とハなんと。(爰にてよの者がなハをとくなり。)(間)じやういの通り申て候へは先畏たと申か。鈴木にハにやわぬすいさんハ御返事の申やうにて候。ことにすね者にて御ざ有程に此折節御せいはいあれかしと存候。(シカく)(間)御尤にて候へどもなわにか、つてさゑ御前をもはぐからずすいさんを申て候間御たすけ被成てもすくにはまじい。たゞ此度御せいはい被成てよく御ざあらうすると存候。(頼朝)いやくいそぎ参れと申候へ。(間)畏て候。あ、いつたんハ申てあれども我君ハめしつかわれんと思召と見えて候が、中くめしつかわれん者とハ存ぜぬもの。是は我君の御おちどかと存れども。さりながらじやういにて候間御前へ参れと申さう。なんと言がき、どころじや(少なぐいふかよし)。(間)いかに鈴木ノ三郎へ申候。御前へさうく御参りあれとの御事にて候。

(166)《桜間》

きいたかく。あ、ぬかつた者じやな。語つてきかせう。扱も頼朝の御兄弟九郎判官平家をたいじのために八嶋の浦おもむき給ふ。当国かつ浦に舟を寄せ桜間の進をせめおとし八嶋への門出にせんとて中くおびた、しき事じや。桜間此由を聞てよりくわかつたうをあつめ談合をあそばされた。おのく申さる、ハ是ハ名大將なり。其上ぶせいなれハひとまづ御引候へと申さる、桜間聞召ていやく一すじいでハかなふまじいと有ていそぎ御こしらゑじや。此由皆くへあいふれいと御事じや。いそいでふれ申さう。皆く承り候へ。頼朝のしやてい九郎判官当国勝浦に舟をよせ桜間の

たちを御せめなされ候。何も年寄わかきによらすらうじやう仕れとの御事にて候。其分心得候へく

(167)《巖洞》

か様に候者ハたかまるのきじん仕ゑ申けんぞくにて候。扱も田村の五郎としなり式百よきにて此三年が間御さいぢんにて我等がおやかたの一大事にて候。先此としなりと申ハ代々へんの家にてはくふおとし〇の將軍と申。其子ハとしひとの將軍奥州せつせのこほり田村の郷にてもふけ給ふによつて田村と申候。奥州より都まで三日にきやうちやく被成たる間、いかなる神のけしんそと皆人ふしん申候。又田村の御はかせをそやわうと申御劔にて御ざ候。又鈴(か)姫と申ハたてゑぼしと申鬼神にて候が、田村とふうふにて候えども、いまハはやぎやくしんと見へ申候程に、赤頭の四郎殿御運のつきたるゆへと存る。はやめんめの身の上まで一大事にきわまり候間、けんぞくをよび出しかけおちのよう意いたさうする間皆く其分心得候へく。

(168)《犀》(協和泉小次郎。謡二「和泉ハ面目是也ト浦山ヌ人こそなかりかりく。中入也。)

是ハ当国の住人泉ノ小次郎と申御方の御内に仕へ申者にて候。去程にそれかし只今是へ出る事よのきにてもなし。たのミたてまつりたる小次郎さい川ゑ御出なされ候間、何と御座あらうすると存、我等も罷出て候。其子さいハ頼朝さい川のほとりゑみかりに御出被成、赤沢山へ御つき有てしばらくよものていを御らんなされ此河ハいか様やうすありげに見えて有が此川ハ何という河ぞと委存たる者ハなきかと御尋なされ候へハ、御ともの人くおほき中にさがみのかミ御ぢやうけたまハつて、さん候此河をハさい河と申けに候と申上られけれハ、頼朝聞召れてそもさい河という子細いかにと御ふ

しんなされ候處に、相模守いやべちなる子細にても御ざなげに候。たゝさいと申者のすみ申によつてさい河と申由承及たるよし申上られ候へハ、扱其さいという物はいかやうなるすがたそとおほせられ候處に、其時御前の人くさいのすがたハ委ハ存せず候が、大かた承りたるはいたゞきにつの一つ有て水ノなかへ入ぬれハさながら水ハ五尺さつて其身ハ諸鳥のこくうをかけるごとくに御ざ有と申伝へ候由申されければ頼朝聞召れ、其さいのつのを取て家の御てうほうになさるべきと有て御供の中に誰か其つのを取て参らすべき者や有べしとの御じやうにて候處に其時、相模守されハ御供の人く何もく兵にて候。中にとりわけたれくと申たりともさいのつのを取て参らせうするハ泉ノ小次郎ならでハ有まじいとたしかに申上られしかば、則小次郎を御前へ召出れ此河にすむさいのつのを取て上よとおほせつけられ候へハ、小次郎御ぢやう承て、やすき間の御事取て上げ申さうすると御ぢやうを申心に存ぜられ候。やうハ頼方ぎの申をゑらひ出され御前に参りさいのつのを取て参らせよとの御ぢやうハ時のめんぼくよのきこへ是にすぎたる事あるまじいと思ひ、御前を罷立てやがてかるくと出立て只今犀河へ出られ候程に、我等ごとき者迄も御供に参らうすると申て候へハ、たのふだ人の申されやうハ、大ぜいにて参り取得たりともさらにてがらにハなるまじく候間、小次郎一人参る程あとより参たる者あらハ曲事たるべしとおほせられ候へども、此度の事ハ一入一大事に存る間、御あとに残て氣遣にていられ間敷。小次郎殿を大せつに思ふ人くハいそいでさい河のほとりゑ出られ候へ。それがしをはじめて先へ罷出候ぞ。かまいて其分心得候へ。く

(169)《河水》(龍女入テ間官人ノ出立也)

御前に候。中くの事委承りて候。畏て候。いかにそうもん申候。

大河の河上ゑせんじの臣下御着有所に龍女一人あらわれてそうもん申度事有て水をとめたるよし申候間、いかやうなる事ぞとの御事にて候へハ、かの龍女いまた妻をもち申さぬ程に百官の内を一人妻に給ハるならハ水をも出し国土の民もゆたかに君あんせんにまもるべしと申され候間、いそぎ百官の内を一人給ハれとの臣下よりのそうもんにて候。心得申て候。是に候。畏て候。そうもん申て候得ハ、いさいきこしめされて候。百官の内を妻にと申ならハ何れにてもゑらひ出し龍女の望を御かなへ有、水をも出して国土の民をもゆたかに有やうにとの御事にて候。其分御心得あらうするにて候。(是ヲ言ハツルト立衆頭ニシンタイ一人出ヨトノチヨクセン也。シカく。謡有て龍女ハ水底ニ入ニケリ。中入也。後サガリハニテ出ル。五人魚ノ類、貝サウ也。同音) おさまれるく御代のしるのためしとて。おとせぬ浪の太鼓を君にさ、け申さん。此君にさ、け申さん。扱もめんく何と思ふぞ。龍宮の姫宮の御祝言ハ目度事にてハないか。其事御祝言有と聞てあれともしかとハしらぬが子細をしつたらハ語てきかさしめ。あふしらすハ語てきかせう。皆くやうきかしめ。たとへハ龍女の思召にハ、我かたのごとも龍宮かいの姫宮とハ成ぬれとも妻をもたさる事ハふかくなり。いかなる者を妻とさだめん。さりながら当今の百官の内を一人妻にかたらハんとおほしめせどもそうもんあるべきやうなかりしかばしあんし給ひていやノとかく大河のようすいをとむるならハ民百姓のめいわくなるべし。しかるにおゐてハ民をはぐみじひじんの君なれハ、さだめて川上を御尋なき事有間敷。其時龍女顕れてそうもんして百官の内を一人妻にかたらうべしと御たくミあつて大河の用水をはたと御とめなされたる間、国土のなやミもつての外なる程にしゆくさまくの御きたうなれども何分龍女のわざなれハ、其しるしさらになかり

しかハ、大河の河上ゑせんじをかうむり臣下殿御出候程に龍女ハたくミまふけ給ひたる御事なれハあらはれ出て川上の水をとむる事我のぞミあるゆへなりと御申候へハ、臣下殿いかやうなるのぞミなりともかなへ申べき。水を出してたひ給へと御申候處に百官の内一人妻に給れと申されしかハ臣下殿やがて君にそうし百官の内を一人妻にくだされ候を龍女悦び其儘むかいに出給ひて龍宮へ御供有御悦びかぎりなし。是成太鼓もじんべんの太鼓にてもしや君にさハリあれハうちでもないになり出しんどうする太鼓なるを龍女妻を給りたる其ゆへに君にさゝげ申さるゝによつてもちて出たり。なんぼう目出度事にてハなきか。誠に様目に目出度事ハない程にいさ酒もりしてなくさむまいか。其事上々の目出度ければ又下ゝも目出度程にいざゝらハ是になミいて酒をのまふ。(サカモリシテシカ)。か様の大酒にいざめんゝあいまいにまふて帰らう。(キリ) あらゝ目出度やめてたいハゝ。七こんまでもおさかなとてめしいたさるゝしやうくわんのしなゝ。うしをにゝうけいりゝちがいゝぎり鯛をしらなます。さしみにすはしりゝさけゝたらまでもゑいぬれハ、いざゝさハいなんとて、座敷をたちうをゝ月もせいごにいるかとなれハ、ゝミやうきり参たんとうせにけり。(太鼓ハ間皆ゝ荷て出る。謡有テぶがく舞有。太鼓鳴出テメイドウセリト謡ウ。)(シテ) ふしきや此太鼓おのれとなるハ天下のひやうらん有べしと聞しに只今此太鼓なるハふしんなり。いそいで尋候へ。(臣下) 畏て候。いかに誰か有。(前ノ間官人。)(御前に候。シカゝ(臣下間) 畏て候。あら奇特や今まで何のさたのなきにふしき成事を仰出されて候。乍去加様の事ハ一大事にて候間、何方へも参り国中の取さたきいて参らう。いや何と申ぞ。それハまことか。されハこそいそいで申上けう。いかにそうもん申候。国中をはしりちつて聞申て候へハリん

国のちんせいしと申者此国をとらうすると申てまふぜいにて南門よりいらんと御事いづく迄も此さたかくれなく候。(中人謡) なへてならさる気色かな。前の間出る所ハらんじやうにて出ル。王出テから前出たる臣下官人呼出ス。)

(170) 《調伏曾我》

御前に候。畏て候。扱もゝ只今箱わう殿のふぜいを見て我等こときの者迄もなミたをながし申て候。誠せんだんハ二葉よりにおうと申。さすが蛙殿の御子にて候ぞ。親のかたき助経をうち度思召。鎌倉殿の箱根詣でにかの助経も定て御供にて有うする。名こそき、給へしかゝ見しり給ハす候間、弁当を頼て御供の人ゝの名をしへて給れと御申有。あれこそくだう市郎と申され候得ハ。はや助経かと其まゝとひかゝらうとせられた。弁当其時思ひあたりか様の所に長居ハせぬ物じや。こちゑ御出候得と申された處へかの助経箱王殿をよびかけて御父蛙殿赤沢山のかりくらにて御はて被成たるを助経がしわざと世上に申由聞及て候。それハしらぬ人の申事にて候とことばに花をさかせ誠しやかに申されれハさすがいとけなき身とて助経にだまされすごゝとなり、あきればてゝ御ざ候處に、頼朝はや御下向被成候間箱王殿しあんして何とちんじてもおやのかたきハ助経なり。一太刀うらみ腹きらんとどうちくの太刀をとりかたきをめがけ給ふ處にどうちく達箱王殿をおつか先ゝ御帰りあれとてつれて帰り申されたるを弁当聞給ひてさりとてハ勞敷なり。いとけないとてかたきをうち給ふ事思ひもよらす。さあらハ助経をかたしるに作、ごまのだんじやうにすゑ調伏して御本意をとげしんすべし。しづまり給へと御なだめ有てごまのだんじやうをかざり候へと仰付られ候間急ぎごまのだんをかざらばやと存る。いかに申上候。最前仰付られたるごまのだんをかざり申て候。中ゝの事。



(171) 《馬乞佐佐木》

是ハ佐佐木殿の御内に仕へ申者にて候。去程に木曾殿都におゐてらうぜきなる由鎌倉殿聞召れ其ぎにおゐていそぎ義仲殿を御たいじなさるべきとの御事にて候間、それに付たのミたる人申上られ候ハぜひと今度生月を拝領いたし先がけを仕り申度とて色／＼申上られ候處に、鎌倉殿のおほせにハ、やすき間の事なれどもいけつきハさいせん梶原色／＼しもふ申せどもとらせ申さざる間成間敷由御申被成けれハ、頼たる人以外腹立にて君一たび伊豆国ほうじやうひるが小嶋ゑ流人とならせられ給ふ時もそれがし御とも申、其外色／＼ちうせついたし申たる事どもをこまかに申上られけれハ、御れうけんなく思召けるか、其後いけづきを佐佐木にくたされ候間、たのミたる人満足申され、おひた、しき用意にて候間、皆／＼其分心得候へ／＼。(シカ／＼有て) (後佐佐木供シテ出。間マネヲスル也。)案内とハ誰にて渡り候ぞ。中／＼いけづきが声にて候。是ハ佐佐木か申うけて候。

(172) 《第六天》

か様に候者ハ伊勢大神宮に仕申末社の神にて候。去程に只今此所ゑ出る事よのぎにあらず。都にげだつ上人と申貴沙門の御座候が、はじめて大神宮へ御参詣なされ候處に第六天のまわうどもあつまつて此度げだつ上人をまだうへ引入佛法をさまたげ申さんとして種々様々にへんじて来り候を大神宮御存知有て急げだつ上人につげしらせんと思召かりに人間と顯れ給ひ、げだつ上人行合先みもすそ河のいわれみやいを尋おわしまし二見の浦に御あがり有、御ものすそよごれたりしをみもすそ河にてきよめ給ふ。仁王十一代垂仁天王うの御宇にはじめてしたつ岩根にみみやいして皇大神と成給ふ。御事則日神・月神是なり。など、神秘迄委御物語なされ扱彼まわうともあ

つまり、仏法をさまたげ申さんとたくむ由沙門にまさしく御つげ被成候間沙門も其御心得参り候。去程に此げだつ上人と申ハ桜本の中納言と申たる御方の御子にて御ざ候がよにたぐひなきちしきにてましますにより南都春日の大明神殊外御でうあいにてへんしのまはなれ給ふ事をいか、と大切に思召す程に貴御方成ハ一入大神宮も大切に思召、此事をつけしらせ給ひ候程にいかやう成まわうなりともしやうげをなさんといたさば神力のしるし有べく候。たちまちめいわくをいたさうする事うたがひも御ざ有間敷と存る。其子細ハ外宮内宮の御神達ハ申に及す、住吉の明神、出雲の大社惣而日本国中の御神達げだつ上人に力を御つけ有べしとの御事にて候間、左様にあらハ当宮の末社、門守りの神迄もこと／＼く罷出てげだつ上人に力をつけ申さうする程に佛法さまたぐる事中／＼成間敷候。か様に申せどもまと言物ハから天竺日本におゐてこくう三界におほきものにてあめ風いなづま類つうにするやつばらなれハゆだんのならぬ者にて候得ハ、はや此内にも何事を仕らうするも存ぜず候程に先此末社の神も歸りて用意をいたし急罷出てげだつ上人に力を付申さうするにて候間、当宮の末社門守り迄ものこらす出られ候へ。其分心得候へ。／＼。

(173) 《降魔》

か様に候者ハ第六天のまわうの内にて四くんと申てかくれなきまわうなり。只今そへ出る事よのぎにあらず。じやうぼん大王の御子七だ太子十九より佛法にもつき今ハはや天竺まかどくじやくめつたうちやうほたいじゆげ金剛さしやうにしてきちしやうさうをしき段上にて尺尊真女あいばつだい十らりきかせうくりたいしこれらの五ひくをさうにしてすてに三十四信断結しやうたうをはじめ給ふ。惣而四界ヨツカイの六天ハこと／＼まわうにて候處に尺尊じやうたうあ

らハまわうのけんぞくも皆尺尊の御弟子と成べし。左様にあらハまわうハ一人も有か無かのやうにならふするとてまけい・しゆら・しやうごでんをはじめとして殊外きをもつぶし何ともして此しやうたうをさまたけ申へきとてきらく・きけん・かつたい女と申てかくれなきびじんの有にばげたぶらかして見んとて高座ちかく参り候へハ、はや釈尊御らんじつて今目前に来る者を見れハ第六天のまわうなり。三人のひしよとなり我しやうたうをさまたけに來りたるなと仰られたる程にさらぬていにもてなし釈尊太子にておわせし時のやしゆたらふにんの事をいふ出し、同じ女のうき身なれハ、ともにあわれをもよをすなり。其しやうたうをさしおいて、わうくうに帰り給へと申ければ、沢尊まことにさまたけをなすならハたちまちびじよの姿鬼面となすべしとて御こゑの下よりたちまち鬼面となりしかは、とかくの事もいわずしていそぎ帰りぬる間、さあらハ像牛<sup>さうメコ</sup>羊此四くんに罷出てしやうたうをさまたけよとの御事にて候間まつそれがし一人ばかり出て候が沢尊ハいかやうにして御座有ぞ。御姿をもよく見申てさまたげのやうをもたくまふと存る。沢尊ハ是に御座有よ。扱もくごんごだうだんの事、ありかたきと存れハおそろしくなり中くたつといともおそろしいとも申べきやうもなく候。いかやうにともしまたけ申さうすると存て候かあのていならハ中くさまたける事ハ思ひもよらず候。さりながら是迄参り此分にて帰る事もいかな。ちとなふつてみたいか。何と仕らうするぞ。いやくよくくしあんをするにそれかし一人してハ成間敷程に残る三人の者ともよび出して談合いたさうする。やあくのこるめもこもやうも三人ながらいそいで出候へ。(三人出談合してコソクラウト言。シカく)いやよのなぶりハ成間敷程に沢尊の御前をかなたこなたとびこゑはねこゑ仕りはなのさきをもはじく程にいたして

あらハこと六ヶ敷おもわれう程に左様にいたすまいか。尤左様がよからう。いさくるわう。高座ちかふゆかふとすれハ、足かもつれて行れぬよ。ちかふよれハかほへおきをさしつくるやうにあついか。いや又行かふとすれハ目かくらうなるぞ。いや。今沢尊のめされたる事を見て有か。かやうに大ゆひをさし給ひたるハ。けんろふ地神に御出あれとの事にてあらうするぞ。又かうく御手をふらせられたるハこくうしんに御出有てまわうをめいわくさせ候へとの事かと思ふ程に長居したらハたつ事もいる事なるまひそ。いさ何方へなりとも急てにけう。(シカく謡。四人下)あらくおそろしやく。はやあしもとハよろくよるとよろめけばまなごもくらみつゑにすかり行べきかたはしらねともく。あしにまかせてにけにけり。はやうにげい。

(174) 《石橋》

か様に候者ハ天竺の行原に住仙人にて候。爰にしやうりやうぜんと申て我等ごときのせがれ仙人どものぞミをなしど、におよんで此橋のもとゑハきたれどもいまだ仙人のつうりきいたらざるによつて石橋をわたる事ならすしてつるにのぞミかなわす候。それをいかにというに、国土世界におゐて橋のかすおほき中にもかの石橋と申ハ人間のわたせる橋にてもなし。た、おのれと出生したる橋にて其長さ三町にあまり候得どもよこのはしくにもたらぬせばきなり。か、りたる處を物にたとふれハにじのふきたるかたちにて雲にそびゑて見ゑたり。したへハ数千丈有て瀧つば迄ハきりふかうして見ゑかたし。いかほど有もしれがたし。水のふかさハなんかいもしらす。うゑハ瀧のいと雲よりおつるごとくにて嵐にひ、きておひたし。橋の石にハこけむしてなめらか成所も有。此橋の本にのぞミむかひを見渡せハ目もくれきもつづれ足ふるいこしもた、す。中く人間

の渡るべきやうもなし。誠そらをかけるつばさまでも羽をやすめかぬる程のけんなんなり。されどもむかひハ文殊の浄土にてつねに世界の花ふり目の前のきどくあらたなれハ、我もくとのぞミをなせども石橋を見てきもをけしわたらんといふ人もなし。然共佛力神力をもつて渡る事も有といえり。いかやうなる貴僧高僧なりとも此橋にのぞミて月日をおくりなんぎやうくぎやうをしては渡ると申が、我等がぶんとしてなんぎやうもくぎやうもしやしんのぎやうもなるまひ。もとより佛神のちからをもつて渡る事も有間敷候程、いか程しやうりやうぜんにのぞミ有ともかなふまじいと存候。さりながら今の身にてこそならずとも仙の法いたるにおゐてハしやうりやうぜんに参るべしとの念願なり。惣而いづれの橋というともおろかに存て渡る事にてなし。其子細は橋のゆらいを尋るに天地かいひやくよりこのかたあめつゆをくだして国土を渡る。是則あまのうき橋といえり。なんばう有難御事にて候ぞ。誠に橋の名所様くにしてすいはのなんをのがれ、万民有難かる事にて候得共、尺にもたらぬ石橋なりともわたせる人ハ佛神もなふじう有、万民よろこびをなすによつて此世にてハむひのらくにほこり来世にてハ佛となるゆゑに橋を渡せるハ人間のちひの内のだい一といへり。いやそなたがど、めくハなに事そやい。何と獅子がいづるといふか。是ハいかな事。何とがないたさうやれ。よくくしあんをするに何と申たりとも橋を渡るべき事ハ思ひもよらぬ事なり。のぞミてもかなわぬ事をぐどくとしていたらハ獅子どもがいきをいにあたつて命をうしなふ事も有べし。先命が有てこそしやうりやうぜんの望も成べけれ。命をうしなふてハ何もなる間敷程に只いそいで罷歸りすいぶんせんかに入て仙の通力いたるにおゐてハ橋を渡る事もならうする。さりながらかやうには申せどもむかひハ文殊の浄土にのぞミはのこる。又こそ爰

にきたらめといさみをなして歸りけれ。

## 注

(1) 『国書総目録』第六卷 岩波書店 昭和四四年四月発行 四六一頁

(2) 拙稿『椋山女学園大学研究論集』第四八号 人文科学篇 椋山女学園大学 平成二九年三月発行 一一一四頁

## 補記

貴重な間狂言本の閲覧・翻刻を許可下さった和泉流狂言方佐藤友彦師に心より感謝いたします。本稿は平成29年度科学研究費助成基盤研究(C)「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とアーカイブ化」(研究代表者・飯塚恵理人、課題番号・17K02432)による成果の一部となります。

\* 文化情報学部 文化情報学科